

ノガイ・オルダの形成

中 村 仁 志

はじめに

チンギス汗の長子ジョチの息子であったバトゥはモンゴルの西方遠征をひきいたのち、黒海からカスピ海の北方に広がる草原地帯の遊牧民を支配下におさめるキプチャク汗国を建てた。これによって北方のロシアは「タタールのくびき」のもとにおかれることとなる。ジョチの子孫たちが支配するジョチ・ウルスのなかでも最大部分であったキプチャク汗国は14世紀より解体・分権化の道をたどり、15世紀のうちにはこれを継承する一群のテュルク=タタール系の国家が並び立つようになった。イスハコフは、このテュルク=タタール系勢力としてカザン汗国、クリミヤ汗国、シャイバン（ウズベク）汗国、アストラハン汗国、カシモフ汗国、チュメニ（シベリア）汗国、大オルダ、ノガイ・オルダを列挙し、これらとならんでジョチ・ウルスの領域で覇を競った勢力としてモスクワ大公国があったことを指摘する¹⁾。

タタール諸勢力とくらべてのモスクワ大公国、すなわちロシアの特殊性としては君主の性格がある。チンギス汗の血統者を汗としていただかないというのがそれである。ロシアでは、モンゴル支配の時代には汗を意味した「ツァーリ」の語が、その後君主の呼称となった。チンギス汗の血統者ではないツァーリが君臨するという状況であるが、これにはロシアにおけるツァーリ概念の歴史的な性格が背景となっている。「タタールのくびき」に先立つキーエフ・ルーシの時代、ロシアでは「ツァーリ」の語はビザンツ帝国の皇帝を意味していた。このツァーリ=皇帝という観念を敷衍すれば、チンギス汗の血統とは関係ないツァーリも可能となろう²⁾。

これに対し、テュルク=タタール系の国家でありながら非チンギス系の君主をいただくという点でロシアと共通していたのが、ノガイ・オルダである。ノガイ・オルダの礎をきずいたエディゲイは、チンギス汗の血統者でなかったため汗の地位につくことはできなかった。このため、エディゲイの子孫たちも、汗ではなく、首長を意味するべくとしてノガイ・オルダを支配した。こうした特殊な性格をもつ遊牧勢力がどのようにして形成されたかを検討する。

1

キプチャク汗国の歴史のなかでエディゲイは異彩を放つ特別の存在であった。エディゲイは分裂・解体の道をたどりつつあったキプチャク汗国にあって、その実力により一時的にはあるが、統一を回復させることに成功した。これにくわえて、エディゲイの事績をきわだったものに行っているのは、彼が草原世界における「英雄時代」を生きた人物であったという点である。

エディゲイの同時代人にはトフタムイシュとティムールがいる。多くの短命の汗が乱立して内部抗争が絶えなかったキプチャク汗国で1380年に汗となったトフタムイシュは、その傑出した手腕で汗国の混乱を鎮めた英主であった。一方、キプチャク汗国を中心とするジョチ=ウルスの南方、中央アジアにあったチャガタイ=ウルスに登場したのがティムールであり、サマルカンドを都として四囲を圧する強力な帝国を建設した。エディゲイの生涯は、この二人の英傑のそれと深く結びついていた。

エディゲイ、トフタムイシュ、ティムールの3者の結びつきは1370年代後半にはじまる。それまで仕えていたウルス汗と不仲になったエディゲイはトフタムイシュのもとにはいった。そのトフタムイシュは、ジョチ=ウルスにおける権力抗争を勝ち抜くために中央アジアの雄ティムールを頼った。ティムールの後援を得たトフタムイシュはライバルをしりぞけジョチ=ウルスの覇権を握るのに成功するが、その後、トフタムイシュとティムールのあいだで抗争が勃発、ティムールは1391年にジョチ=ウルスに遠征してトフタムイシュを打ち破っ

た。この遠征にあたり、エディゲイはティムールに従いその軍の一翼を担ったのである。遠征が終わってティムールがサマルカンドにひきあげた後も、エディゲイは口実を設けてジョチ=ウルスにとどまり、自身の勢力基盤の確立をはかった。地盤とすべき場所として白羽の矢を立てられたのがカスピ海の北岸に注ぐヤイク川（現在のウラル川³⁾）とエンバ川のあいだの草原地域であった。汗の居所であった都のサライが位置し、キプチャク汗国の伝統的な中心となっていたヴォルガ川の流域ではなく、東方のヤイク・エンバ河間に腰を据えたエディゲイは、自身の出身部族であったマンギート族をカフカース北嶺のステップ地域から呼び寄せ⁴⁾、マンギート族を中核に遊牧民の諸勢力を糾合して、実力をたくわえていった。

エディゲイの支配のスタイルは、バクリヤリバクという顕職につき、実質的な権力を握るというものであった。形式的には汗につぐ立場にあり、汗国の軍事=行政における要職であったバクリヤリバクには、チンギス汗の血統者や各部族の首長であったバクなどのエリートがついた。13世紀後半のキプチャク汗国内でバクリヤリバクとして汗国の政治に大きな役割を演じたノガイ（一説には、彼の名前がノガイ・タタールの由来になったという）は、傍系の血筋であったため汗にこそなれなかったものの、ジョチの血統者であった。一方、非チンギス系のバクリヤリバクとしては、14世紀後半に権勢をふるったママイがいる。ママイと同じく非チンギス系の実力者であったエディゲイも、ジョチの血統者を汗としていただきつつ、バクリヤリバクとして政治を左右した。こうした性格の君主としてエディゲイと最初に組んだのが、彼の甥にあたるティムール=クトウルクであり1391年に汗となった。

君主の座に自分の意のままにあやつれる汗をたてるというやり方は、ティムールの統治方法であった。チンギス汗の第2子チャガタイを始祖とするチャガタイ=ウルスの西部で頭角を現したティムールは、チャガタイ家の汗をいただきつつ自身はアミール（エミール）の称号で政務をとった。トレパヴロフは、ながらくティムールのもとにいて、彼が名ばかりの汗たちのもとで統治する姿

をつぶさに見ていたエディゲイが、そのスタイルを借用したのであろうと推測している⁵⁾。

エディゲイとティムール=クトゥルク汗は、東方で着々と力を蓄えつつ、さらなる勢力拡大の機会をうかがっていたが、それはまもなく訪れた。1395年から96年にかけてティムールが二度目のキプチャク汗国への遠征を敢行、以前の敗北のダメージから立ち直りつつあったトフタムイシュをふたたび破った。これによって統一の実を失い、諸勢力が分立するようになったキプチャク汗国の解体過程を食い止めようとしたのがエディゲイとティムール=クトゥルクであり、ヴォルガ川流域のサライを手中におさめたのをはじめ短期間のうちに勝利をかさねて、1399年春には実質的な全土の統一をはたした⁶⁾。

一方、敗れたトフタムイシュは、捲土重来を期すべく西方のリトアニアを頼った。当時のリトアニアは、かつてのキーエフ・ルーシの領土の西半を支配する大国であり、その大公ヴィタウタスは東欧の雄として勇名をはせていた。ヴィタウタスはトフタムイシュの支援要請に応じ、東方への遠征にのりだした。ヴィタウタスとトフタムイシュの連合軍の接近を前に、エディゲイとティムール=クトゥルク汗もこれを迎撃すべく軍をすすめた。両軍は1399年8月にヴォルスクラ河畔で激突、戦いはエディゲイ側の完勝に終わった。

かくしてキプチャク汗国における第一人者としてエディゲイの地位はゆるがないものとなった。ほどなくティムール=クトゥルク汗が死亡したのちも、エディゲイはティムール=クトゥルクの縁につながる者たちをつぎつぎとかいらいの汗に立てつつベクリヤリベクとして汗国の支配をほしいままにした。さらに、1406年（ないし7年）にはトフタムイシュを敗死させ、彼との長年にわたる因縁に終止符を打っている。

かくして権力の絶頂期に立ったエディゲイは、1408年にロシア遠征を敢行する。エディゲイ以前に彼と同じくベクリヤリベクの立場でタタール勢をひきいてロシアにむかった人物としてはママイがいる。この時、正統の支配者=汗ではないママイの前に敢然とたちはだかったのがモスクワ大公ドミトリーであ

り、1380年、ドン川河畔のクリコヴォでママイを打ち破った。有名な「クリコヴォの戦い」である。それから約30年をへだてたエディゲイの遠征に対し、当時のロシア大公ヴァシーリー1世はモスクワを退去し難を逃れようとした。ヴァシーリーは「クリコヴォの英雄」ドミトリーの息子であったが、父とはちがいベクリヤリベクのエディゲイにたちむかおうとはしなかった。ヴィタウタスやトフタムイシュに勝利したエディゲイの声望の大きさがしのばれよう。

2

末期のキプチャク汗国の歴史に大きな足跡を記したエディゲイが1419年に死亡した後、彼の子孫たちは、偉大な父祖が残した政治的な遺産のうちの何を、いかに引き継ぐこととなったのであろうか。エディゲイを行動の指針、ロール・モデルとする子孫たちがめざすべき目標は、二つに大別される。一つはベクリヤリベクとして汗とコンビを組み、可能であれば汗を飾り物の支配者にまつりあげて自分が汗国の政治を牛耳ること。もう一つはエディゲイが権力の基盤としたヤイク・エンバ河間にいるタタール人たちをたばねて、マンギート族を中核とする独立の遊牧勢力にしたてあげることである。

このうちベクリヤリベクとして汗国の政務全般にわたって力を発揮するにあって問題となるのは、コンビを組むべき汗の選択である。ジョチの子孫であれば、誰であっても汗になりえるとはいえ、現実には、エディゲイの一族とゆかりが深い人物に白羽の矢が立つのが自然な成り行きであった。エディゲイの父バルトウィチャクやエディゲイ自身が仕えた汗であるウルスの縁者、ティムール=クトゥルクをはじめ、エディゲイによって擁立された一連の汗たちの縁者などがその候補である。

また、縁戚関係によって汗との紐帯を強めることも重要であった。エディゲイが支配のスタイルを学んだ中央アジアの雄ティムールは、汗家の女性を妃としてキュレゲン、すなわち婿と呼ばれていた。エディゲイもトフタムイシュの娘チャヌイケ⁷⁾を妃とした一方、自分の甥のティムール=クトゥルクを汗とし

て擁立した。またティムール=クトゥルクの息子で後に汗となるティムールに対しては、エディゲイは自分の長男ヌル=アッディンの娘⁸⁾をめあわせている。このティムールの息子のクチュク=ムハンマドとその子孫は、エディゲイの一門ととりわけ深いつながりをもつこととなるであろう。

どの汗と組むべきかという選択とならんで権力掌握上の焦点となったのは、サライをめぐる攻防である。分権化、諸勢力分立の傾向がとどめようがなくなっていたキプチャク汗国にあっても、歴代の汗が居所としたサライは、タタール人世界では格別の重みをもっており、他勢力に号令しようとする君主たちはサライを手中に収めるのを目標とした。この点でエディゲイの息子たちと、とりわけ深い関係をもったのが、ボラク、クチュク=ムハンマド、ウルク=ムハンマドの3人の汗であった。

数多くいたエディゲイの息子のうち、長男のヌル=アッディンは父より早く他界していた。このためエディゲイ亡き後の遺児のうち最年長者としてふるまう立場になったのはマンスールであった。マンスールは、幼かったクチュク=ムハンマドを汗として擁立したものの、その後クチュク=ムハンマドから離れてボラクのもとにおもむき、彼のもとでベクリヤリベクの地位についた⁹⁾。

ボラクの祖父にあたるウルスは、エディゲイ自身がトフタマイシュ汗のもとにはしる前に汗として仕えた人物であった。ウルスの孫ボラクは、マンスールをしたがえてサライに座していたウルク=ムハンマド汗¹⁰⁾を破り、彼にかわってサライの支配者となった。その後ウルク=ムハンマドとボラクのあいだでサライの支配をめぐる抗争がつづくなか、1426（ないし27）年に、ボラクがマンスールに裏切りの嫌疑をかけ処刑するという事件がおこる。

マンスールの弟であったガージーとナウルスは、兄の処刑に反発、ボラクのもとを離れてクチュク=ムハンマドと組んで、1428年から29年の交にボラクを敗死させた。その後ほどなくして、ナウルスはサライのウルク=ムハンマドのもとでベクリヤリベクを、ガージーはヴォルガ川河口部のハジー=タルハン（後のアストラハン）を拠点とするクチュク=ムハンマドのもとでベクリヤリ

バクをつとめるようになる。こうして、エディゲイの息子たちをそれぞれしたがえたウルク＝ムハンマドとクチュク＝ムハンマドがヴォルガ川の流域で対峙するという事態となった。

二人のムハンマドのあいだの勢力均衡が破れる契機となったのは、ナウルスとウルク＝ムハンマドの関係の決裂である。ナウルスは約10年にわたってウルク＝ムハンマドのベクリヤリバクをつとめた後、彼のもとを離れクチュク＝ムハンマドの陣営に転じた。その時点でガージーがすでに死亡していたためナウルスはクチュク＝ムハンマドのベクリヤリバクとなる。ナウルスの加入によってウルク＝ムハンマドを圧倒する勢力を擁するようになったクチュク＝ムハンマドはサライからウルク＝ムハンマドを追うのに成功する。

以上見てきたように、エディゲイの息子であったマンスール、ガージー、ナウルスの兄弟は、サライの攻防を焦点とする汗たちの盛衰に大きな影響を与えた。彼らは、最終的にはエディゲイ一門と関係の深かったクチュク＝ムハンマドのベクリヤリバクとして、その勝利に貢献したのである。クチュク＝ムハンマドの一族とエディゲイの家門との関係はその後もつづく。クチュク＝ムハンマド汗のもとでヴォルガ流域を中心に形成された大オルダは、クチュク＝ムハンマドの息子のアフメト汗の時代になると西方や南方に大きく勢力を拡張し、草原地帯の最大勢力となる。このアフメト汗のもとでベクリヤリバクをつとめその事業を支えたのがマンスールの息子のティムールであった。そればかりでなく、1481年にアフメトが東方勢力の奇襲を受けて横死した後は、ティムールはアフメトの遺児たちを支え、大オルダの柱石としての役割をはたす。さらに1480年代なかばにティムールが死亡した後は、彼の甥や息子たちが、アフメトの息子たちのもとでベクリヤリバクとなったのである¹¹⁾。

また、ティムールの娘、すなわちエディゲイの曾孫にあたるヌルサルタンは婚姻による諸汗家とのつながりという点で出色の存在となった。ヌルサルタンは、1466年にカザン汗のハリルに嫁すが、翌年夫と死別、新汗となったハリルの弟イブラヒムと再婚し数人の子供をもうけた。1479年にイブラヒムが死去し

た後、ヌルサルタンは、父のティムールの思惑もあり、1486年にクリミヤ汗のメングリ=ギレイと3度目の結婚をする。マンギートとクリミヤの関係¹²⁾に大きな影響をおよぼすことになるこの結婚は、それと同時に、カザンの汗位をめぐる国際関係の行方をも左右した。その後クリミヤとロシアが協力してヌルサルタンと故イブラヒムの息子たちをカザンの汗として擁立する政策をとったため、クリミヤ汗の妃にしてカザン汗の母という立場になったヌルサルタンは、ロシア=クリミヤ=カザン関係におけるキーパーソンとなったのである。

カザン、クリミヤをあわせて3人の汗の妃となったヌルサルタンと同じく3人の汗を夫としたのが、シュユン=ビケである。シュユン=ビケは、ノガイ・オルダの首長であったユースフの娘であった。ユースフはエディゲイからみて4代目の子孫であり、後述するムーサの息子である。カザンの汗位をめぐるロシアとクリミヤの協力関係のかなめとしての役割を演じたヌルサルタンと対照的に、シュユン=ビケはカザンを軸とするロシアとクリミヤの抗争の渦中に身をおくはめとなった。1533年に、前年ロシアの手でカザンの汗位につけられたばかりのジャン=アリーと結婚¹³⁾をしたシュユン=ビケは1535年にカザンで勃発した蜂起でジャン=アリーが死亡した後、クリミヤ汗家の出であったカザン汗サファ=ギレイの妃となる。夫の死後、幼い息子のウチャミシュ=ギレイの摂政となるが、まもなくカザンの汗位がロシアが擁立したシャフ=アリー(ジャン=アリーの兄)のものとなると、シュユン=ビケも彼の妃となったのである。

3

エディゲイは、ヤイク・エンバ河間を中心とするマンギートのユルトをその勢力の基盤としていた。ユルトとは、テュルク語で遊牧民が居住する天幕、ひいては遊牧集団が居住・遊牧する土地、さらには領土、国を意味する語である。マンギートのユルト、すなわちマンギートが居住・支配する地域である。タタール世界の伝承のなかでは、エディゲイはしばしば、独立勢力としてのノ

ガイ・オルダを創設した人物として語られており、研究者のなかにもそのように見なす者も多い¹⁴⁾。しかしエディゲイの時代のヤイク・エンバ河間のマンギートのユルトは、トレバヴロフが指摘するように、あくまでキプチャク汗国の構成部分とみなされるべきであり¹⁵⁾、独立勢力としてのノガイ・オルダの形成は、エディゲイの子孫であったマンギート族の支配者たちにゆだねられることとなる。それは、どのような過程をたどって実現したのか。

マンギートのユルトは、地域的に白帳汗国、金帳汗国、青帳汗国に三分されるジョチ=ウルスのなかでは青帳汗国の一部であった。ジョチ=ウルスの誕生の地であり、その本領ともいべき西シベリアのイルティシュ川流域を中心とする地域は、ジョチの死後、長子のオルダにひきつがれた。これが白帳汗国である。一方、モンゴルの西方遠征をひきいた次子バトゥが黒海からカスピ海の北に広がる広大なキプチャク草原を支配するようになったのが金帳汗国である。そして、白帳汗国と金帳汗国の中間、ヤイク川の東につくられたのがジョチの第5子シャイバンらを支配者とする青帳汗国であった。

このため、後年ノガイ・オルダがその一隅に形成されることになる青帳汗国にあっては、エディゲイの子孫のマンギートの支配者たちとシャイバンの家門の汗たちとがさまざまな関係を結んだ。たとえば、エディゲイの死後、残された息子のなかで最年長であったマンスールは、父の遺志をくんで1421年ころ西南シベリアに拠るシャイバン家のハジ=ムハンマドを汗として擁立し、そのベクリヤリベクとなった¹⁶⁾。その後、マンスールはハジ=ムハンマドのもとを離れてボラク汗のベクリヤリベクとなり、サライをめぐる攻防に身を投じるのは先述したとおりである。一方、ハジ=ムハンマドについては、後年、彼の子孫のイバク（サイド=イブラヒム）が、エディゲイの子孫たちと深いかわりをもつこととなるであろう。

エディゲイの死後、数年間にわたって勢力争いがつづいた青帳汗国内で、シャイバンの家系者のなかから傑出した実力者があらわれた。1428年から68年にかけて40年の長きにわたって汗の地位にあったアブル=ハイルである。アブ

ル=ハイルの権力を支えたのは、ウズベクと呼ばれる遊牧民の集団であった。14世紀前半にキプチャク汗国の全盛期を現出させた伝説的な君主であるウズベク汗にちなんだ名前をもつ遊牧集団ウズベクを忠実な徒党としたアブル=ハイルは、強力な支配をきずきあげた。シャイバン家の汗が君臨するウズベク人の国家である。イスハコフは、15世紀の青帳汗国には、このシャイバン国家（ウズベク汗国）、チュメニ（シベリア）汗国、ノガイ・オルダの3国が成立したとし、後2者はシャイバン国家（ウズベク汗国）の一部が分離して形成されたと指摘する¹⁷⁾。この過程はどのようにすすんだのであろうか。

エディゲイの子孫のなかで、アブル=ハイルのもとで頭角をあらわしたのがバッカスである。アブル=ハイル汗のベクリヤリベクをつとめたバッカスは、エディゲイの長男ヌル=アッディンの息子であった。ヌル=アッディンが父エディゲイより早く死去していたため、エディゲイ没後に彼の息子世代が活躍するなかで、暫時逼塞せざるをえなかったヌル=アッディンの家門であったが、バッカスの登場以降は、この一門のメンバーたちがノガイ・オルダ形成の主たる担い手となっていく。

長きにわたるアブル=ハイル汗の治世のうち、その前半においては汗とベクリヤリベクのバッカスの関係は良好であり、両者は緊密な連携をたもち、マンギート勢力は、アブル=ハイルのウズベク汗国の右翼（=西部）に属していた¹⁸⁾。とはいえ、アブル=ハイルとマンギートは、すべてにわたって協同歩調をとったわけではない。勢力拡大をめざす方向については、齟齬もみられた。

アブル=ハイルが進出の矛先を向けたのは南方の中央アジア、すなわちティムール朝の領域であった。アブル=ハイルは、もともとシベリアの西南部を拠点としていたが、1446年にシル川の下流域を支配下におさめると、この地のスィグナクへの遷都を敢行し¹⁹⁾、国家の重点をも南に移したのである。アブル=ハイルの南下政策は子孫にもうけつがれ、ついに、アブル=ハイルの孫ムハンマド・シャイバーニーが、中央アジアに進出、1500年にシャイバーニー朝を樹立することとなる。

一方、バッカスとその子孫が勢力拡張をめざしたのは西方であり、ヴォルガ川下流域を支配した大オルダと敵対しつつ、西方への進出をはかった。こうした動きを反映し、マンギートのユルトの都は、その西部にあるヤイク川下流のウラルチクにおかれることとなる²⁰⁾。

1440年代後半にバッカスが死亡すると、彼の弟や息子たちがマンギートをひきいるようになった。アブル=ハイル汗がバッカスの弟のアッバスを後任のベクリヤリベクとしたように²¹⁾、バッカス亡き後もアブル=ハイルとバッカスの一門とのつながりは保たれたが、マンギート勢力のシャイバン国家（ウズベク汗国）からの分離も徐々にすすんでいった。このマンギート勢力の分離・独立の過程において決定的な役割をはたすことになるのが、バッカスの息子のムーサであり、トレパヴロフは、ムーサを独立したマンギートのユルト、つまりノガイ・オルダの真の創設者であると評している²²⁾。

遊牧民世界における社会的ステータスとしては、ムーサはヤドカルなるジョチの家系者を汗に擁立し、そのベクリヤリベクの地位についた。多くの汗が乱立した当時の青帳汗国では、ムーサのような実力者の後ろ盾があれば、汗位につくのも可能であったのである²³⁾。とはいえ、青帳汗国内の諸汗のなかでは、アブル=ハイルが最高の実力者であるという序列は確固としており、他の汗たちはその風下に立つことをよぎなくされた。

青帳汗国におけるこうした秩序は、1468年のアブル=ハイルの死によって大きな変化をむかえる。焦点となったのは、アブル=ハイルの死後も彼の子孫たちが他を圧する優位の地位を占めつづけるかどうかであった。アブル=ハイルの息子であったシェイフ=ハイダルが汗位につくと、はたしてアブル=ハイルの家門の支配に対する反発が噴出する。アブル=ハイルの時代、逼塞をよぎなくされていた各地の有力者たちが連携して立ち上がったのである。西シベリアのチュメニの汗イバクヤカザフのジャニベク、マンギートのムーサとその弟ヤムグルチ、彼らの叔父であったアッバスなどからなる連合勢力は、シェイフ=ハイダルを破り、敗死させた。

かくして青帳汗国では、突出した実力者が存在しない、諸勢力分立の状況となる。40年の長きにおよぶアブル=ハイル支配の後の新時代の到来である。こうしたなか、マンギートをひきいるムーサは、どのような汗とコンビを組むことを選択したのか。模索の末に選ばれたのが、シベリアのイバクである。

イバクは、上記のシェイフ=ハイダル打倒の際にも活躍した果敢な軍事指導者であった。1481年には、ムーサらとともに、強大な大オルダの汗アフメトを敗死させている。ロシア史上有名な1480年の「ウグラの対陣」²⁴⁾から撤退したアフメトが軍を解いたすきをねらった急襲であり、タタール世界における勢力関係を一変させた出来事であった。

イバクとマンギートの関係は緊密であり、外部勢力からは、イバクは「マンギートの汗」と呼ばれるほどであった²⁵⁾。とはいえ、これはあくまでさほど大きな勢力を有していなかったイバクの汗としての権力がマンギートの勢力に依拠していたということであり²⁶⁾、イバクが自分の意のままに動かせる手勢としてマンギートを隷下においていたわけではない。イバク自身の地盤は、当時チンギ=トウラといったチュメニ²⁷⁾を中心とする南西シベリアにあったが、ここにおいてもイバクは絶対的な権力者ではなく、在地の有力氏族であるタイブギドもあなどりがたい力をもっていた、結局イバクは1494年（ないし95年）にタイブギドとの争いで斃れることとなったのである。

ほどなく、マンギートを長きにわたってひきいてきたムーサも1502年ころ死亡した。ムーサ自身がエディゲイの曾孫にあたっていたことからうかがえるように、14世紀末にエディゲイによってヤイク・エンバ河間に集団としての基礎をすえられたタタール人の一群も、16世紀初めともなると3～4世代を経ており、エディゲイの子孫のもとに凝集力をもった遊牧勢力としての実をそなえるようになっていた。こうなれば、名目上の君主としての汗は、集団を維持するうえでかならずしも必要ではなくなってくる。ここにエディゲイの子孫を首長としていただく独立勢力としてのノガイ・オルダが成立したのである。

マンギートにおけるこうした動きがすすんだ時代、ロシアにおいても君主権

の性格が大きく変わりつつあった。遊牧集団の首長であるベクは、ロシアにおけるクニャージ、すなわち公と同列とみなされる身分であった。タタール世界では、ベクのなかの有力者が汗からベクリヤリベクに任じられて汗に次ぐ立場となった。一方、ロシアにおいては、「タタールのくびき」時代、汗は数多くいたロシアの公のなかから一人を選んで、彼に勅許を与えて諸公のなかの第一人者である大公の地位を保証し、代償として大公はロシアの諸公国からの貢税をとりたて汗のもとに送った。すなわち、汗あっての大公の地位であり、この点では汗国内のベクリヤリベクと似かよった立場であった。

汗の認可を必要とする大公という体制からの脱却をはかったのが、1462年から1505年にかけてモスクワ大公であったイヴァン3世である。イヴァンの父ヴァシーリー2世がサライにおもむき汗に大公の勅許を求めたように伝統的なロシア=タタール関係の枠組みに縛られていたのに対し、イヴァン3世はロシアの統一をすすめつつ、汗権力からの自立をはかった。1480年にはイヴァン3世は、汗への服従を要求して遠征してきた大オルダのアフメト汗の軍勢を「ウグラの対陣」でしりぞけることに成功する。かくして「タタールのくびき」からの解放をはたしたロシアの君主は、上級権力者である汗の勅許によって大公の身分を保証される立場を脱し、独立した専制君主の道を歩む²⁸⁾。

ロシアにおける君主権のありようの変化と符節をあわせるように、マンギートの支配者の性格もまた変貌していった²⁹⁾。イヴァン3世とほぼ同時代を生きたムーサのもとで、汗から与えられるベクリヤリベクの地位に依存しない、独立勢力としてのノガイ・オルダの君主へと変わっていったのである。

おわりに

出身部族であったマンギートに支えられたエディゲイは、汗につぐ顕職であったベクリヤリベクとしてキプチャク汗国の政務を牛耳った。こうしたエディゲイの支配のありかたは、彼の後継者たちにどのようにうけつがれたのか。

ジョチ=ウルスの解体期、数多くのジョチの血統者が汗として並び立つようになるなかマンギートの支配者たちが、ベクリヤリバクとして汗とどのような関係を結ぶかは、汗が有している権力基盤の大きさに左右される。強大な汗と組めば、汗の権勢を背景としてベクリヤリバクも勢力を伸張させることが可能であるが、汗国の政務は汗を中心として運営されていく。反対に弱小な汗を推戴すれば、彼をベクリヤリバクの操り人形にすることが可能である一方、競合する周辺勢力に圧倒されるおそれがある。

キプチャク汗国の末期における強大な汗といえば、トフタムイシュがその代表格であろう。汗国の再統一をはたしたトフタムイシュは、名実ともに汗国一の実力者であった。トフタムイシュ汗のもとでは、エディゲイはその補佐役にとどまらざるをえない。そこでもちあがったのが、トフタムイシュとティムールとの抗争である。ティムールは2度にわたってジョチ=ウルスに遠征し、トフタムイシュを破った。この外部からの衝撃によって生じた権力の空白を利用してエディゲイは台頭をはたし、第一人者の地位を獲得していった。

エディゲイの死後、子孫たちは彼がのこした政治的な遺産の継承・発展につとめることとなる。エディゲイの息子たちのうちマンスール、ガージー、ナウルスなどは、さまざまな汗のもとでベクリヤリバクの地位につきサライの攻防を中心とする覇権争いに参加した。これは、タタール世界の命運を左右する実力者としてのエディゲイの活動をひきついだものとみなせるであろう。

一方、マンギートを中心とするノガイ・オルダの創設である。キプチャク汗国全体の政務を宰領するのに多忙であったエディゲイは、自身の勢力基盤であったヤイク・エンバ河間のマンギートのユルトについては、主として長男のヌル=アッディンにゆだねた³⁰⁾。ヌル=アッディン自身は父より先に死亡するものの、こうした事情からマンギートのユルトはヌル=アッディンの子孫たちにとって、とりわけ関係が深い地域となる。この地域が含まれる青帳汗国では、シャイバン家のアブル=ハイル汗が1428年から長期にわたってヘゲモニーを握った。ヌル=アッディンの息子バッカスは、アブル=ハイルのベクリヤリ

バクとしてその支配を支えつつ、マンギートのユルトを維持し、そこに暮らす遊牧民たちを掌握するのに尽力した。

1468年にアブル=ハイルが死亡した後は、バッカスの息子ムーサを中心に自立への動きがすすむ。ムーサはシベリアのイバクらと連合してアブル=ハイルの息子シェイフ=ハイダルを破り、アブル=ハイルの家門による青帳汗国支配に終止符をうった。その後、傑出した力をもつ汗が再現する可能性を慎重にしりぞけつつ、マンギートの支配者たちは、ヤイク・エンバ河間の住民の遊牧集団としての凝集力を高めた。その結果、ムーサが16世紀初め死亡したころには、マンギートのユルトは汗を君主としていただかない独立の遊牧勢力としてのノガイ・オルダへと変わっていった。

注

- 1) Д. М. Исаков. Тюрко-татарские государства XV-XVI вв. Казань, 2009. с. 6.
- 2) 一方、東方の諸民族のあいだでは、君主がツァーリであり、汗であるという伝統が生きており、16世紀以降はロシアの君主は「白いツァーリ」とみなされるようになる。「白いツァーリ」については、В. В. Трепавлов « Белый царь »: Образ монарха и представления о подданстве у народов России XV-XVIII вв. М., 2007 参照。
- 3) 18世紀のエカテリーナ2世の時代に、ヤイク川の流域にあったヤイク・カザーク軍団を震源に起こったプガチョフ反乱が鎮圧された後、反乱の記憶を一掃するためヤイク・カザークはウラル・カザーク、ヤイク川はウラル川と改名された。
- 4) В. В. Трепавлов. Орда самовольная: кочевая империя ногаев XV-XVII вв. М., 2014. с. 17.
- 5) Там же. с. 19.
- 6) История татар с древнейших времен. Т. 3: Улус Джучи (Золотая Орда). XIII - середина XV вв. Казань, 2009. с. 713.
- 7) Ю. Почекаев. Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. СПб., 2012. с. 405.
- 8) В. В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. Очерк истории. Тула, 2010. с. 58.
- 9) Там же. с. 57.
- 10) Уルク=ムハンマドについては、Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 228-243 参照。
- 11) В. В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 78, 80.
- 12) クリミヤ汗国における、ティムール一族をはじめとするマンギート勢力の存在について

ては、К. Базилович. Внешняя политика русского централизованного государства. Вторая половина XV в. М., 1952. с. 181-82 参照。

- 13) ロシアは、カザンをつうじてノガイと反クリミヤの立場で同盟するのに資するとの判断からチャン=アリーとシュユン=ビケの結婚に同意した。しかし、17歳のチャン=アリーは政略結婚の相手であったシュユン=ビケには冷淡であり、岳父であったユースフの不興をかうこととなる (Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство: 1445-1552: очерки истории. Казань. 2009. с. 151)。
- 14) たとえば、コチェカエフは、エディゲイをノガイ国家の創始者とみなし、エディゲイのマンギートのユルトは1391年にキプチャク汗国から分離したとする (Б.-А. Б. Кочекаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. Алма-Ата, 1988. с. 19)。
- 15) В. В. Трепавлов. Орда самовольная. с. 18.
- 16) Там же. с. 26.
- 17) Д. М. Исхаков. Тюрко-татарские государства XV-XVI вв. с. 24.
- 18) В. В. Трепавлов. Орда самовольная. с. 26.
- 19) Д. М. Исхаков. Тюрко-татарские государства XV-XVI вв. с. 25, История татар с древнейших времен. Т. 3: Улус Джучи (Золотая Орда). с. 724.
- 20) В. В. Трепавлов. Орда самовольная. с. 28-29.
- 21) Там же. с. 29.
- 22) Там же.
- 23) Там же. с. 30.
- 24) 「ウグラの対陣」については、Н. С. Борисов. Иван III. М., 2000. с. 430-45 参照。
- 25) Д. М. Исхаков. Тюрко-татарские государства XV-XVI вв. с. 31.
- 26) コチェカエフは、イバクとその一党は弱小勢力であり、ノガイ・オルダの支持がぜひとも必要であったとする (Б.-А.Б. Кочекаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. с. 19)。
- 27) チュメニ油田で有名なチュメニは、エルマークのシベリア汗国への遠征にはじまるロシアのシベリア進出の拠点として1586年に建設された。なお、エルマークに抗して戦ったシベリア汗国の汗クチュムは、イバクの子孫であった。
- 28) 「専制君主」をあらわすロシア語самодержец は、字義どおりには「自分で保つ者」の意味である。外部勢力による認可や支持を必要とせず、自身の力で君主の地位を保てるものがロシアの専制君主であった。
- 29) ロシアとノガイ・オルダの関係の端緒については、Б.-А.Б. Кочекаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. с. 65-73 参照。
- 30) В. В. Трепавлов. Орда самовольная. с. 22.